

保育者養成から保育者へ

八坂 富子

保育者に望む人間像

今年も大勢の若い先生たちが現場へ巣立っていきました。人園当初の子どもたちと、新米先生のおりなす生活模様は、まさに体と体のぶつかり合いです。一日の保育が終わって子どもを送り出すと、くたくたになってしまいます。泣いたり笑ったりの中で心が通い合い、安心して依存し、信頼ができるのです。

一、子どもの信頼にこたえられる先生

子どもの信頼にこたえるにはどうしたらいいでしょうか。受持の先生が変わったり、新しい友だちがふえて人的環境が変わってくると、警戒したり、緊張したりしています。それが安心して心のとびらを開いてくれるのは目と目が合った瞬間からです。ことばつたない幼児は、目が物を言います。一方通行

のことも通じ、行動が共にできるようになったら、しめたもです。

二、子どもと共に動く先生

傍観的であったり、指導的であったりすると子どもは離れていってしまいます。

「僕の仲間だ、私の仲間だ」と思ってくれるような関係であつたら、完全についてくるものです。私は毎日子どもの動きと先生の動きを見ながら思うのです。若い先生はいいなと思います。動きが軽快です。そしてテンポや遊びの発想が子どもとびつたりするのでしょうか。子どもは若い先生が大好きです。

子どもと遊べるようになったら一人前です。でも本当はむずかしいことですね。保育の専門家として要求される技術でしょう。

三、先生自身の人から

遊びの世界には教科書はありません。裸のおつき合いですから、先生の身から伝わったり、与えられたりするものを、子どもは無条件で吸収していきます。だから先生の人からが問題になるのです。

意識しないでもその人から自然に滲み出るもの、それが人からでしょうか。

—ある朝子どもを迎えた時のスナップ—

・子どもよりあとからすべりこんだA先生

「どうして来たの、休んでもいいのに」と。

・子どもより早く来て待ち受けていたB先生

「おはよう」とただひとこと。

明るいことばとやさしい表情。二人の子どもの対照的な反応が目に見えるようです。

このふたつの対照的な場面に私は誠実さの開きを感じるのです。保育の理論や技術を論じる前の問題です。その人の生まれから今日に至るまでの長い生活歴の中ででき上がったものが人からです。

ひとり保育者養成にその責めを負わせられません。長い間の家庭教育、学校教育、広くは社会教育に何か欠けたものがあつたのでしょうか。誠実さひとつ取りあげてみても教室で教科書を

媒体にして学習するようなものではありません。

家庭では両親や家族の姿から、学校では先生の姿から、社会では近隣の人たちの姿から、学びとっていくものです。

それらを意識的にとりあげて体系づけたものが倫理学であったり道徳教育であったりするのではないのでしょうか。実感を伴わない、経験の裏づけのない学問は知識として定着するかも知れませんが、人からとして身につくことは至難だと思えます。

四、伸びていこうとする意欲をもった先生

新卒や新任の先生にはあまり問題はありません。はじめの職場での驚きや緊張で吸収していこうとする意欲が旺盛です。

一年たち二年たちする間に、安易なところに身を置いてしまうマンネリ型と、苦しみながら模索して、伸びていこうとする意欲型にわかれてくるのです。

毎日していることになぜ疑問をもたないのですか。指導計画を実践の段階でつまずきはなかったのですか。幼児の疑問をとりあげたり、質問を育てていかなければならない先生自身がなら反省もせず問題意識をもたなければ、伸びていこうとする意欲なんかわいてくるはずがありません。

幼稚園でも保育園でも、大切な幼児の教育の一端を負っています。今日より明日へと発展していくものです。意欲のないと

ころに向上はしません。先生の伸びていこうとする意欲が向上の出発点だと思います。

保育者養成を考える

一、外側の問題

よい先生を大量に現場へ送り出していたことが緊急な願いです。ことに大都市では需給関係のアンバランスで人手不足に悩んでいます。国や地方自治体の計画養成のほかに、指定養成機関や一般の大学で資格を与えられるところがたくさんあるのに、現場では求人難ということは一体どういうことでしょうか。

受け入れ側にも魅力がなかったり、労働条件の悪いことも確かに原因のひとつでしょう。せっかく資格をもっているも他の職場に流れてしまいます。

家庭に埋もれている潜在能力をひき出すことも人手不足を解消するために考えなければなりません。労働条件の改善ひとつ取り上げてみても保育施設の中だけではどうにもならない大きな課題です。悪条件の下でより保育効果をあげていくことを、内に向かつては当然のことながら、外に向かつては無理な要求なのかもしれません。なぜなら権利意識の非常に強い世相の中に生きている人たちですから。

二、内側の問題 カリキュラムの改善

戦後の学制改革を境にして保育者の養成も大きな変革をしたように思います。それは専門学校から大学へと発展に伴うカリキュラムの改善です。一般教養が幅広く履習できて、専門科目も細分化され、単なる専門家の養成ではなくて高度な教養を身につけた社会人ということが基盤になっているようです。

新しい学制による四年課程卒業生が現場に送られてくるようになって、なおその感を深くしました。ことに、選ばれた人たちによる狭い世界での感覚かもしれませんが、私たちの世代には考えられないいいものをもっていました。物の考え方やきり込み方がちがいます。将来指導的な立場になる人はこれだけの基礎学力が必要だと思っています。

この人たちが中堅層になって次代の幼児教育を担ってくれたらと非常に希望をもって現職をはなれたものです。しかし、戦後四半世紀を過ぎて、一応板についたカリキュラムも次の改善のステップを踏もうとしています。

いろいろな問題点の中で教育実習とか保育実習についての反省です。

実習単位が少な過ぎることです。私が見たかぎりでは非常に短期間にそのおくれを取り戻していましたが、現在の四年課程の中では他のいろいろな免許状を取らなければ、実習や現場へ

おもむいての研究はかなりできるゆとりがあると思います。

二年課程では、幼稚園の四単位と保母の六単位の実習はどうにもならないほど必修単位でいっぱいです。実習単位を大幅に広げるためには、修業年限の延長かインターン制度を設けなければ無理でしょう。

かつての徒弟制度にも似た保育実習の中に非常にいいものを発見することができるのです。現在の教育の中で最も欠けた人間性の陶冶、さきに述べた保育者としての人がらがこの中で育てられたように思うのです。

四十年前の入学式のご挨拶に「小僧じこみにいたします」といわれた倉橋先生のことばが忘れられません。その後講義の中ではしばしばヒューマニズムとか人間尊重ということばを耳にしました。

今考えてみると、人間尊重と小僧じこみとは全く相反したイメージをもつのですが、共存することに何の異和感も無いのです。教育実習を指導してくださる先生の人間性にふれること、それには長期で連続的であることが望ましいのです。

また行ないながら学ぶところに価値があるのです。耳から入った保育原理を「ああこれか」と目で理解したり、行動でつまづいたことが講義の中でわかったりするのです。

三、ヨーロッパの保育者養成から

先來ヨーロッパの幼児教育を視察しました時に保育者養成について特に感じましたことは（昭和四十六年九月）

1 保育実習が尊重されている

北歐 コペンハーゲン アマガーブランン幼稚園訪問の際きいた話から

・教員養成大学に入学前に何年かの現場経験をもつこと。在学中も教育実習が尊重されているということです。

西ドイツ フランクフルト デーケアセンター訪問

・団長又は指導者となる者は大学で修士課程をおえなければならぬ。一般の教師は三年間の養成課程で講義と実習の単位を修得する。

西ベルリン ベスタロッツフレールハウス訪問

この視察旅行中訪問した唯一の保育者養成機関でした。お茶をいただきながらフレールベルのお孫さんのような所長さんから聞いたお話です。

・一八七四年にフレールベルの姪によって設立されたもので、専門のソシアルワーカーになるためにはさらに大学に進む必要がある。

・修業年限は高校卒業後二〜三年

・家庭や幼稚園の実習を重くみている。一年目は六週間、二年

目は一年間の実習を行ない、理論と實際を一緒に学ぶ。

・教員養成の組織としては、少数の学生に対して多数の教職員と多くの付属幼稚園をもっている。

東ベルリン 公立幼稚園訪問

・高校卒業後二年の養成課程と入学前に一年の現場経験が要求される。

また一定の経験年数を積むと教育委員会の推せんを受けて国家試験により資格を得る方法がある。

フランス パリ エコールマテルネル訪問

・高校卒業後四年コースの大学へ行く。または高校卒業後二年間の現場経験を積み、国家試験を受けて資格を得る方法もある。

イギリス ロンドン 幼児学校保育学校訪問

・教育大学三年課程で資格が得られる。さらに一年間勉強すると学位をとることができる。また総合大学で四年間学ぶと学位をとることができて、学位をとろうとする者に教えることができる。

2 保育者の労働条件がいい

がいて開団時間が長いのに勤務時間が短いのです。それは二交代制になっていたり、職務分担を明らかにして、真中の時間帯を教師が保育として、両親共働きの家庭の幼児のために早

朝や夕方四時半以後は、養護専門の職員が見ているところもありました。

国によって保育制度も異なり所管もまちまちですから同列で比較することはできませんが、考え方が多様で非常に柔軟性に富んでいます。保育時間も個々人によって異なり、同一施設間で全日保育の子もあり、半日で帰る子もあります。

したがって現職の先生が研修のために大学のゼミに参加することもごく当り前のこととして行なわれています。

3 幼保一元的養成

保育制度そのものが一本化しているので、養成も一本のレベルに集中して行なわれるのは当然のことです。似たようなレベルを二本しいて二元的な養成をしている日本の現状は、一見合理的なようで末端の現場では非常に不便を感じています。相互乗り入れが振り出しへ戻らなければできないため、有能な人を無資格者として抱えていなければなりません。

よい先生を、幼保を問わず、たくさん現場へ送り出していくためにも、養成を一本化して履習科目を整理すれば密度の高いカリキュラムができるのではないのでしょうか。

現行法の下ではどうにもならないかもしれません。

何といっても保育を支えているものは人です。人を高めることが保育を高めることにつながります。

(東福保育園)